2025年7月27日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

祝福のこだま

［民数記22章4～6、23章5～12節］

 当時、ツィポルの子バラクがモアブ王であった。彼は、ユーフラテス川流域にあるアマウ人の町ペトルに住むベオルの子バラムを招こうとして、使者を送り、こう伝えた。「今ここに、エジプトから上って来た一つの民がいる。今や彼らは、地の面を覆い、わたしの前に住んでいる。この民はわたしよりも強大だ。今すぐに来て、わたしのためにこの民を呪ってもらいたい。そうすれば、わたしはこれを撃ち破って、この国から追い出すことができるだろう。あなたが祝福する者は祝福され、あなたが呪う者は呪われることを、わたしは知っている。」

主は、バラムの口に言葉を授け、「バラクのもとに帰ってこう告げなさい」と命じられた。バラムが戻ると、バラクは、モアブの長たちと共に、焼き尽くす献げ物のそばに立っていた。バラムはこの託宣を述べた。

バラクはアラムから／モアブの王は東の山々からわたしを連れて来た。「来て、わたしのためにヤコブを呪え。来て、イスラエルをののしれ。」

神が呪いをかけぬものに／どうしてわたしが呪いをかけられよう。主がののしらぬものを／どうしてわたしがののしれよう。わたしは岩山の頂から彼らを見／丘の上から彼らを見渡す。見よ、これは独り離れて住む民／自分を諸国の民のうちに数えない。誰がヤコブの砂粒を数えられようか。誰がイスラエルの無数の民を数えられようか。わたしは正しい人が死ぬように死に／わたしの終わりは彼らと同じようでありたい。

バラクはバラムに、「あなたは、何ということをしたのですか。わたしは敵に呪いをかけるために、あなたを連れて来たのに、あなたは彼らを祝福してしまった」と言うと、バラムは答えた。「主がわたしの口に授けること、わたしはそれだけを忠実に告げるのです。」

[1]　バラクとバラムの物語

今日の聖書箇所の民数記の、モアブ王バラクと、そのバラクに呼び出される預言者バラムの話は、神様の「祝福」をめぐる話で、なかなか面白いです。

バラムは、民数記の22章から24章に登場します。当時のモアブ王バラクは、イスラエルがカナンの地へ向かうのを恐れ、預言者バラムにイスラエルを呪わせようとしました。「この民はわたしよりも強大だ。今すぐに来て、わたしのためにこの民を呪ってもらいたい。そうすれば、わたしはこれを撃ち破って、この国から追い出すことができるだろう。あなたが祝福する者は祝福され、あなたが呪う者は呪われることを、わたしは知っている。」 でも、バラムはそれを断るのです。バラムの思いと言うよりも、神様が彼らについて行くなと言われたからです。そうするとバラクは更に報酬を積むから、イスラエルの民に呪いをかけてくれと言うのですね。しかしそれでもバラムは「神の言葉に逆らうことは出来ません」と言うのですが、神様の方が今度は「彼らと行くがよい。しかし、私があなたに告げることだけを行わねばならない」（22:20）と言って、モアブからの仕え人と共に出かけるのです。しかし今度は、主のみ使いが、彼が乗っていたろばの行く手をさえぎり、進めなくなってしまったので、バラムはろばを杖で打ったと言います。するとろばが口を開き、三度も私を打つなんてどういうことだと言うと、バラムは、それは勝手な行動をとるからだと言って言い争っているんです。そこに主のみ使いが現れて、ろばは私のせいで止まったのだよと言いますと、バラムは納得して先に進むというちょっと不思議な話もあります。そして23章、バラクはバラムと共にイスラエルの民が見渡せる丘に登り、そこで燔祭を捧げさせるのです。バラクは、「やっとだ」と思ったことでしょうが、ここで神様はバラムに、イスラエルに対する呪いの言葉ではなく、祝福の言葉を授けるのです。バラクはビックリし、そして言った言葉が23：11～12です。―「バラクはバラムに、「あなたは、何ということをしたのですか。わたしは敵に呪いをかけるために、あなたを連れて来たのに、あなたは彼らを祝福してしまった」と言うと、バラムは答えた。「主がわたしの口に授けること、わたしはそれだけを忠実に告げるのです」。…というようなストーリーです。

[2] 「呪い」ではなく「祝福」を！

さて、このちょっと不思議な物語は一体何を私たちに告げようとしているのでしょうか？私たちはこのストーリーの中で、ただ自分は神様の言葉・神様の思いだけを取り次ごうとするバラムの在り方に教えられる気が致しますし、また、この話の中で中心になっていることは「神様の祝福」ということで、それが中心ですね。その「神の祝福」というものはどんなにお金を積まれようが、又、‟「祝福」ではなく「呪い」を告げよ”と命じられようが、それは、どんな人間的な圧力や工作を以ってしても決して打ち消すことは出来ない、不動のものなのだということを教えられます。これは凄いことではないかな、と私は思いました。

そしてそもそも、私たち信仰者にとって、最も大事な事は、この「神の祝福」ということではないかと思うのです。私たちは、神様によって祝福されているということです。「神の祝福」とは何でしょうか？色んな意味合いがあると思いますけれども、言えることは、それは「存在の肯定」です。私たちの存在は、神様によって肯定されているということ。本当に尊ばれ、喜ばれているということ。しかし、私たちは、もしかしますと、「祝福」とは反対のことの方に敏感かもしれません。つまり「呪い」です。「呪い」というのは、「存在の否定」です。「お前など必要ない」「お前は消えろ」という棄却です。それが他者に対してだけでなく、自らに向かうこともあります。他者を、そして自分を棄却する。「呪い」というのは「魂の殺人」と言っても良いと思います。それをバラクは、イスラエルの民に望み、バラムはそれを否定した訳です。「神はそんなことは言っていない」と。

[3] イエス様の祝福をこだまさせる器として

ある牧師は、この箇所との関連で、使徒パウロが書いた、ローマの信徒への手紙12:14の言葉を通して説教しました。その聖句はこの礼拝の「招きの聖句」で読んだ言葉です。「あなた方を迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません。」　その牧師先生は、この言葉をパウロは、主イエスがそうお命じになった言葉として引用しているのではなく、パウロ自身からのローマの信徒に宛てた言葉として記していることに着目しています。つまり、「迫害する者のために祈れ」というのは、主イエスの言葉と生き様がそうであり、そこに原点は有るのですけれども、パウロ自身も、もうそれを人に勧める程自らの言葉にしていたということです。言い換えれば、本当に主イエス様の言葉と生き様が、自分を造っていたということですね。

そしてその牧師はこのようなことを語られていました。―***「（パウロは）神の祝福を、迫害する者にあなたの口で告げなさいと言う。信じられないことです。私たちは、神が悪い奴らを滅ぼされれば、本当に神は存在すると思う。何か酷いことをされれば何倍にも打ち返し、思い知らせたいと思う。しかし、それは本当に私がこうありたいと望む自分の姿でしょうか。むしろ本当の私を失うことになってはいないでしょうか。」***…本当にそうだなと思いました。悪に対して復讐することで収めようとするこの世の価値があります。いえ、私たちに根付いている「闇」があります。報復を良しとする思いです。そしてそれは自分の力で消せるものではありません。ですから、その牧師はこう続けていました。―***「神は、私たちの祝福の言葉を通して、神の存在をこの世に現すと言っておられるのです。そしてそこに、私という人間もはっきりとした存在にさせられるのではないでしょうか。私が自分でけりをつけるよりももっと遥かにはっきりと、神が祝福と呪いの分かれ目をお定めになったからです。その分かれ目はイエス・キリストにあります。イエス・キリストによって、呪われるべき全ての者を祝福するのだと。イエス・キリストによって、人の呪いをご自分がお引き受けになる、と。呪われるべき者を祝福する。これは、イエス・キリストに満ちている、驚くべき神の決意なのです。」***

 私は、本当にそうなのだなぁ、と思い、嬉しくなりました。私たちの口は、もう他者に対しても、又自分に対しても「呪い」の言葉を吐かなくて良いということですね。十字架の主が、人間の「呪い」を全部飲み込まれたからです。***「呪いではなく、祝福を祈りなさい」。***この御言葉に生きることで、私たちの内に主イエスが住んで下さり、ただ私たちを変革して下さる「聖霊」によって、呪いは消え去って行くのです。クリスチャンとは、ただこの世界に、自分自身と自分の言葉や祈りを通して、神様の変わらぬ祝福を届けていく存在だと言えるのです！

どうでしょう？私たちの人生は、たかだか長く生きても百年です。ある意味、あっと言う間ですね。昨年亡くなったノンフィクション作家の佐々涼子さん（私より9才も若い！）が、『エンド・オブ・ライフ』（集英社文庫）という本の中で、京都で終末期患者の訪問介護師をされていた森山文則さんのことを書いておられていて、森山師自身もすい臓がんが発見され、余命宣告をされながら（49才で召天）もその働きを出来るまで続けたその記録が綴られているのですけれども、この本を書いた佐々さんに森山師は、生前こう語っていたそうです。―***「ぼくには、人に腹を立てたり、何かを悲しんだりする時間はないんですよ」***と。

…私たちも皆そうなのではないでしょうか？

あのバラムは、神様の言葉、神様の心をフェイク（偽り）には出来なかったんです。「神は、神の民を祝福し給う！」私はそれを告げる。それ以外ではない。私たち神様に祝福されているクリスチャンの生き様も、もの凄く単純なのだと思います。私たちは、神様の、イエス様の祝福をこだまさせていく器（楽器）のようなものなのではないでしょうか？この楽器、自分で吹いたら、呪いのような音しか出てこないような者ですが、神様に吹いて頂きましょう。そして私たちには謎と思える生活の事柄も、「最終的に責任を取って下さるのは神様、あなたです！」との信頼をもって生きて行きたいと思います。主は、私たちと共にいます！

お祈りを捧げましょう。